



青木賊
三編
新堂書店



3869
74



3869
74

利
3942
8

題目次

磨^マル^ル
く^くま^まい^いー^ーて
す^すか^かの^のり^り
何^何乃^乃の^のり^り
も^もの^のり^り
か^かの^のり^り
ひ^ひら^らの^のり^り
廣^廣の^のり^り

新^新ら^ら
よ^よい^い有^有夜^夜
あ^あら^らの^のり^り
の^のり^り
延^延の^のり^り
引^引の^のり^り
サ^サの^のり^り
お^おの^のり^り
の^のり^り

大正七年三月
室井平藏氏贈

きつて
それだけ
是で
根か
い
いろく
まづ
うさ
存が
案の

い
音
あ
い
入
そ
半
叩
ふ
し

何
際
ま
う
ゆ
ゆ
心
ふ
い
出

何
ひ
号
ふ
二
う
心
襟
い
の

へしかけく
我ぞし
古くは
疾つた
まじく
おまじ
長あそも
まじく
実飛
まじく

らつち
さつち
能あ
まじか
まじか
まじか
まじか
まじか
まじか
まじか

せんご
あま
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ

放ちて
百年目
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ
まじ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '何年' and '日'.

冠

新大賊



浪卷 園田 秋風 選

磨り

傳 満 書 物 庫

多 少 多 少 多 少 多 少

郷 郷 郷 郷 郷 郷 郷 郷

仕 仕 仕 仕 仕 仕 仕 仕

出 出 出 出 出 出 出 出

仕 仕 仕 仕 仕 仕 仕 仕

新ら
雙と活した沖
手福も注連を待
かゆりと振て居る月利
歌よみ事系曲輪

ミビしん

みぞ楽しむ奥女中
言高水は浅道
是を仕居る人の
後し

流の涼しく生かす

よの夜

悉く不意仕舞入り
赤内か殺ぬ阿常
柵すううぬ別
歌しれ入こい物
聞かひて

娘のうらけの薩
扇をとんきく居る名
又次よ事係系誰
断

不ばしい
 波の如くおもしろ
 きてはかすねれぬ
 今と云ふと
 神と清くは
 縁おとす
 張るやこれ
 船の如く
 移り香る
 浴場

何乃

男侍
 縁無
 又新
 斗か
 延び
 乃
 酒の

格子か

書 概と入せるを以て裕

出 隆とともなすせかた

切 崎乃性 崎乃下火

範 雜味 出物 蔵屋 補

祝 の 業 業 入 唐 寺 僧

衣 入 と 事 と 寺 西 寺 ぬ

心 入 も れ 出 入 名 室 の 池

出 接 妻 飛 入 元 踏 屋

一 根 漆 入 風 仙 花

サアモホトヤ

松 高 貴 侯 菴 斗 一

車 高 丸 孫 先 寺 出 師

之 務 入 の 了 玉 れ 行 せ

余 不 入 を 町 場 海 五

行 之 地 日 せ 向 入

口 舌 賢 打 婦 女 帝

閑 入 寺 心 池 蛇 の 目

下地
でみうそふ怖い
突るあふハ卦
悔て居るので口
後身日士一女又
身

おかやいふ

いふふらふと孫乃
言生れ振一涼い
りそふ角二妻の
後人の服ふ立ッ店涼

後人もえふ妻の
鹽、孫乃突く
店乃け起る決り
店乃

乃きかゆの務がけ
手とけ下強く急の
とつともまきこれ
巨燧蒲草と
切乃下りあ殺入の
噫ハせは信と

ぞりし寺
 成て来し慈乃夷
 惚しし先をりた
 河入し書ふ小
 慈之し中し孝仲
 之く答乃擧別
 乃道し仲以せぬ
 乃と慈此亦に
 田舎乃之の津
 乃がこ此実乃
 乃其の同

つらしに

昔人へ妻の事
 乃押えての
 乃て入し
 乃乃あし心
 乃乃あし心

あふ入して

何ものぬま
 皆結たまの
 乃乃志し
 乃乃志し

振てんめ

おのれ、いふ、この世の我

實つ、世を伴す林及者

人教、あふ玉、師

悔、おま、乃、實、さ、る

三社、こ、ち、り、世、利、分、市

猶、信、り、ふ、ま、る、折、る、し

思ひ切

年、号、乃、ん、ん、ぬ、大、福、帳

徳、の、根、も、あ、る、ほ、い

お、肉、は、ん、り、を、更、さ、る、し

ち、か、わ、ら、せ

お、時、は、び、び、牛、車、の、音

一、お、登、て、つ、つ、後、紳

い、い、送、り、て、去、ぬ、大、徳、屋

お、つ、り、お、つ、り、お、つ、り、持

お、ん、い、い、出、さ、角、の、取

お、つ、り、お、つ、り、お、つ、り、け、る

お、つ、り、お、つ、り、お、つ、り、切、取、り

お、つ、り、お、つ、り、お、つ、り、切、取、り

しつとれく

泥子下、喜くぬ江戸の味

粗くぬ操、酒さす

留るを夜さす、母を夜

夫、人さす、あらず餅

舞、人、浩く、人さす

酔、を、さく、ハ、厚、おさす

仲、人、仕、ゆ、く、柳、さす

家、さ、ぬ、伊、伊、仲、居、惚、さす

盡、か、つ、か、行、者、講、さす

柳、意、勤、を、ほ、す、月、日、士

大、ま、舞、一、が、吹、巾、籠、く

美、ま、高、成、る、恵、入、垣

開、け、く、く、く、

夕、時、ふ、系、る、女、又、連

女、子、で、身、形、お、さ、す、産

沖、を、見、時、す、流、く、人

子、あ、け、酒、人、さ、出、る、或、講

酒、さ、す、大、紙、細、工

どしどし割い

井か子乃多し飯のけ
三味線も越へ神も紙へ
女人を紙に女形
悪知り乃去ぬまのる
本戸と接交と舞の伴
あかあかある節乃
能く清く
舞妓さしむる行乃下
客儀も老むるまかせ

あ乃きし日が宿酔
乃乃の妻と突お張り
家内若くはお下の湯
口乃酒ふんテ割割
あもは寝癖とはるてけ
飲むまゝ飲す貸仕業
勤も紙へ一々小巻
あが関は信條の皮
あをよる女感どしん
住寺のもあ哭らるるま

子と連く

相見えらるゝなる二交の縁
かまひを名、行矣春女夫
操乃賣てあ侍お計
長町、出る大なる色
まゝ名姓船を侍小堂
老をみろるんれ一日
病、ふ寄たた病子買
来ると健一は急女夫
結の血取ある等、旬

梅子よ

妻、おどけ侍市戻り
他人が叩く返せ証
曲端乃らうとやうき妻
天定をうらうらとく人
や家々ありある眼のくさ
目、もらふ結よ下舞の雇
仲居が何びくか人
物、遠く、あつたか女
くぢら、ほふ雪、積、は
口、吞入、ほふ雪、積、は

見事して

正解さす大友

欠女うらなひ

南中へ寄つて御願

まか依若子へ是を

やうを讀め是を

いふ止まぬ

侍を岡大聖

七十五日出

講義の口吞

らうらうと

侍へまゝに

飲酒するやう

おろし居る

序幕で暇

内乃は連繩

山と笑ひ

下夕又重く

幸以向ひ

釣瓶乃さし

はつと
我もまなうに座はま
あをかりしに御前
小使はさしに子
馬士を戦おし下女
糠下は洗ひ置帽子
法若も在るは
おれが殿すまはら

はつと
世に初はははる
いんまの合はる
女房はさしに先
御所乃はるは
川起
解き石は古着板
おむ事取はる
女は連はる
未来は忠乃暖屋

杖突て

骨根のち又い味いゆい各
振神も来る入佛事

心細し

能ひ人さるまゝ聴見

森を何ぞとて云る

秋の空は柄は盡かこ

娘入さして囉入き女

大うくくめ小玉信る

兄と舞えの石を立す

三三乃事お祈り

コ、た、り

灸をきめる鼻 汗下

塩水あつて笑人度す

新曲乃別な色るまう

の心を

懐と歌せぬおひけし

和葉の書あとも川

拍々情おあれ 味

あふおつてあつて祝

くらがりく

まゝに居るはくは

皆に終に舟をこく

大はつちくちの管をせ

役場を仕とせり候

志はほく居る也合

物乃嬉しく酒をく

い立てる

酒をく候は候

下は流るる候

葉乃踊もはれ

髪は流の行を

かあ

笑乃候は候

独りあはれ

善い候は候

水庭も何は候

花母あは候

水庭も何は候

かゝる

織る^た乃^ち鳴く^り又^も鳴く^り
て^い別^れと

嬉^しい^ま又^もさ^らに^も喜^ぶ

心^を翔^かす^る下^の里

乃^ちさ^らに^も中^に行^く

心^の他^に他^には

神^をも^もて^も救^はぬ

ま^はら^ぬて^も救^はぬ

母^を救^はぬ

満^ちた^りに^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

考^へら^れて^も救^はぬ

長たしん

岸の所いけでも

初谷よたしめ

小段して

女房乃決

おやま

命体た

いらも

縁

再乃

つ

せ

あ

業

年

中

程

小

ま

振るる

丁ちやう吹ふ乃の顔かほたるたるる草くさししるる

髪かみ乃の結むすむむるる出い角かく力ちから

此こゝ乃の結むすむむるる小こ便べん機き相あ

加かささりりしし

美み男おとこ乃の周しゅう果くわああるるここをを

段だんのの分ぶんららぬぬ乃の結むすむむるる織おり

書かきくくちちをを度どのの比ひずずるるもも味あじわわいい

乃の結むすむむるるににああるるににああるる

可か愛あいささしし此こゝ増ましし肉にく忌い形かたち

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる姓せい

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

乃の喜よろこぶぶ乃のちちをを乃の結むすむむるる

いそ
はきし

中く女まら〜成り

強ん失し〜報 扱

人群りそのは葉の候

女まふ園はるぬ 屋

言おと笑きて居る前お

〜
〜

妻い何ぢぢら〜を利し

浦よ半因名乃 運

引ずし〜を〜お丸

〜
〜

一人〜と〜大拾し

〜
〜

〜
〜

〜
〜

〜
〜

〜
〜

〜
〜

〜
〜

〜
〜

巻でッア

友の 信守 母の 海子
我 理を 塞ぐ 事の 仇
似る 姑婦 夢ん 心を 奪ひ
八百屋 房信 研 並べ

意一くく

ゆるふく 成と 琴の 仇
際 足る 出る 彦後 守平
巫所 一 寄る 音 男
位中 一 あり 培 幸一 意

女 夫 桑 居る 女 の 根
入る 續 入る 糸 解
掃 出く ちと 着 足る 柄を
色 疾ふ ぬめ ぬ 仕 振る ぶ

根 浪り

寄 ぬく 入る ぬき 何ん せん さま
葉 一 寄る ちと ちと 葉
身 心 の 入る 後 ち 耳
口 叩く 徳 女 碎

いせしと

内務省ふくしよの事務しよ

旅たび乃な休やすむ

事こと外ほかの休やすむ

事ことの切きり

ちちの夫つまの松まつゆゆ

敵たか孫まごづづの伊い達だちの妻つま

勤しん勞らう乃な休やすむ

事ことの切きり

勤しん勞らう乃な休やすむ

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

事ことの切きり

さやいのれ

浦 〽 軒 〽 七五 〽

娘 〽 らいふおるおれお子あや

の 〽 誠すくも九十 〽 川

又 〽 合入るあや 〽 抱てま

〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽 〽 〽 〽 〽

〽 〽 〽

たぶさしと

女人多しけり 生浦

華 籠の世を 吾 坊

言ふは下を 成る 建る

即 台々

マ 遊 釣し 又 吾 坊

仕 合 者 上 巻 下 行

換 ぎ の 序 で 振 ぎ ぬ

顔 色 を 出 さ ぬ 娘 入 心

と 河 口 ありて

人 々の 心 へ 融 け ぬ 和

女 房 と 居 乃 飲 ち

志 ね ぶ ね 巻 表 表

か ー ぬ ん ど 飲 の 書

ふ っ っ っ

大 江 ぶ

神 を 信 じ 小 巻 女 房

妻 子 乃 利 づ ぬ 巻

人 々 々 々 々 々 目 後

實のぼり

心乃すやうにうーろき

其れはうーろき

帯座、巻る妻乃

惚きいんせぬ悪の

陰て居候く云

いやういぬぬ悪の

あも

序をを走るあり

雪降るう出はり

同屋かゝる揚の

纏きな悪杖忘

巻る、巻路よ文乃る

巻きで貸しに若る

戸をぬくあ、妻、

そ、妻がんれ小権

座もる寄る、舞の

巻る、巻路よ文乃る

少少一ふ

素人のつらさを知る

年々老れゆくを待つ

半端な引てくその

帆汁のうらみ角力とり

おもしろげ

街へ出ると母に

おのいびき響く

お休むられぬ

お笑ひの心

お母さんお母さん

おのいびき

おと

おのいびき

おのいびき

おのいびき

おのいびき

おのいびき

おのいびき

おのいびき

おのいびき

ちいそくし
精買ぬる猪曼
丁火を呵る林
窪急なる角力
門松か洲は社

丁度よ

か比乃重くる令り
夏んふらる書
とらふえぬの宮
景景ふたつた

利がかり

心経乃神楽料し
はしるる芳人木
妻と悟るを仕
文と取る極木
手取をけらるる

をかいふ

妻と拵つて老す
ちうらぬや乃
先中へ後て居る

おのゝち

果敢あづかるる女の衣

後妻と隠す寺まゝ

ゆらいでひらく強直

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

テハキみ能くおま

けつひ

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

ゆらいでひらく強直

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

かげ

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

あはせきつと抱くおま

かざん終ふ

女房乃合子^{うそ}の口
梅^{うめ}こて居る^ゐ持子^{もちこ}人
女房^{にやう}の惚^{おぼ}き^お枕^{まくら}
おほ^{おほ}ほ^ほの^の書^{かき}の^の紙^{かみ}

けさつて

潤^{うる}如^{ごと}ほ^ほしい^い書^{かき}の^の紙^{かみ}
馳^は走^はり^り合^あわ^わし^し布^ふ張^て包^つむ
任^まち^ちの^のり^りお^おの^の病^{びやう}マ^マの^のれ
山^{やま}乃^のも^もし^し妻^{つま}の^の鬼^{おに}

かおる^{かおる}おん^{おん}

子^この^の妻^{つま}の^の義^ぎ市^{いち}の^の面^{めん}ん
乃^の指^{さし}か^かけ^けて^てお^おの^の病^{びやう}の^の症^{しやう}
病^{びやう}乃^の子^こと^とお^おの^の目^めの^の目^め
唇^{くちびる}の^の色^{いろ}も^もお^おの^の唇^{くちびる}の^の色^{いろ}
を^をお^おの^の目^めの^の目^めの^の目^めの^の目^め

かほい^{かほい}事^{こと}

被^かり^りの^の今^{いま}出^で川^{がわ}
こ^この^の居^ゐる^る共^{とも}に^に殺^{ころ}す

七十一

よき劇

帝乃宰相がしる書りしに
根付てはゆりしをぬ 涙
更この書きよむりしに

我らに

主れ替りしゆけしより
尻をさしぬる店
病つゝも中し出
持つまんとてはるの程
似顔のなまもは折し

このゆある瀬を渡り
半玉の糸ぶつゝか
女房は巻る糸の町
まゝと新うさむ被せは
粹そげし合し初
あみをかきと行る鮎
抱てんぬ
巻がほしき貴ハ夫
やうしと来て来し行ぬ
あみゆいさくならを

たからしやう

非樂と隣るるまどく

と襟かける盤 男

東入しと子さうや

人切

初と歌よおやと此

悔も次ぐ興家志

とと乃卯と愛浩

親のおいふ頼付

かゝりまはしれん

焼お控けし酒乃

母に文、足え

女房志まはし

紫と受て子角

習法傳り孤船

口々

婚するもささ

較買ふとさめ

子海子代也寸

綱乃小サいお

膳

そらとて

みおの海つこ子 櫻

海斗 志

焼結 妻の下女

まよ 柳

そよが彼

ほろを 柳

死殺 浩たる 葉

子 正 形 毒

ゆ 名 同

去 柳 柳

登 乃 侍 柳

ま 柳

柳 乃 柳

柳 乃 柳

連 乃 柳

そらとて

で 子 柳

髪 柳

かん 柳

おんがても

又と招くあし一餅

とメぬ曲輪と妻ハ

娘茶たんちやうふい合

左が明かさぬまっ乃恋

子をえうけし新お屋

心うらぬいよ状かく

大まお年と笑う一ま

なましけふん

茶を場でお年寄く

いふくゆ極とける又

大言ふ眼と森と刺

こうらたき

柳うら漢るほし乃灯

ほ乃生あしけさ守お

影つゝ来と系お柳

味の事

あつるる乃守い二人

甘ゆもの止むまら傘

おろろ町行二人く連

うきうき

うきうきうきうきうきうき

おつらうちやう通る先キ

上正乃方う換く本換

大さちと新の折

うやまう

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

あつらふしつらあつら

うづあづき

あはれ幕を切る 糸

ちんむも佐々木薬師

おのの田地と端り

ふりゆても

ふはまゝうしんが神

又こごまうしんが麻やき

美ふひ深た中を味子

まなまのまぬまのまひ髪切

徳しが持系

お乃亭が淋し

被く蝶々

ふ吸ふ蝶も女又連

さざりぬり粧業師

二人りして

術飯工侍も

禪引が伝切し

汁濃撥くつる二舟

沈目りしふみ林きよ

ふりかへ

船ぞ母を母に流す

口乃岩中く火吹舟

道の雪半ル雪裏り

碇よりなる瀬沼を町

星焼を尺は妻自澄

こころごと

小信んを巻る六日

往てるや後家ハ二人

納豆おてまを巻るを

心あはれ

願下居るを巻るか

女子巻るはさ子の巻

信能まこすおてんせ

困りぬるんとる人

うら女房りよで巻る

心あはれ

折り乃れかく病むる文

母を巻るも巻る人

までお帰るれりて居る

きつが来て

隣のも 接 柵 ひやし

始 まし く 痛 る さし 白

遊 人 へ 見 遣 文 合 け

い の も ぬ ち る 幼 化 活 女

お や 月 乃 姉 へ 遊 ぶ 女

昔 活 も 活 ぬ 人 へ ち

絨 布 を 売 け 仕 へ 玉

四 通 も 出 家 や り ち の 花 弁

襦 袢 一 部

毎 日 や り ち の 花 弁

美 理 知 初 め ち へ 一 部

山 へ ち 遣 り ぬ ち 向 り 礼

心 合 け ち へ 物 へ 人

ひ や し と

女 房 乃 ち ち ち ち ち

襦 袢 一 部 付 け ち ち

女 子 乃 ち ち ち ち ち

いんせんと

燗の湯い 薫 秋 場

揚 乃 此 こと 係 涼 乃 乃

お ね 織 立 せ て 夢 下 られ

いんせんと

下 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

不 仲 失 乃 乃 乃 乃 乃

破 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

後 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

いんせんと

乃 子 事 乃 乃 乃 乃 乃

二 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

あぢくふハ
響がゆく仕取下
浮名もまそ者皆書
虫愛し、事は廓の生
ほして去りて遊
そくゆらめき形も世のもの
鳥乃笑ふ中ふさく

洗ふて七

古ハさ月る唐文
早涼

あはれ名ごある納豆箱

大徳し

土利もそる家振書
白根うらうら

川吟歌そる居る
耳もそる居る

怪系が恨あまふ
まのいまそる

葉が

古佛もそる奥
院

そく 既し

子 體て 異つて 異つて 異つて 甲がら

漱 や 先く せん 体 初 親

後ろ へ せん せん せん せん 体

御堂 へ せん せん 杖 初メ

有馬 へ 町て せんて 立女

せん せん せん せん せん 眼 著

又 へ せん せん せん 百姓 宿

氣 夫也

蔵 中て 建て 久せ せん せん

米 端く 居 候 毒 二格

心 痛く せん せん せん せん

紙 を つか つか つか つか つか

仕 取 せん せん せん せん せん

拾 せん せん せん せん せん

妻 へ せん せん せん せん せん

隣 へ せん せん せん せん せん

毎 へ せん せん せん せん せん

ゆくゆく
美を侍く居る画師の妻
みねまことよふかしの侍
美東御殿乃朝孫
とけて又トふいさく
湯女と申すりりり
かえりて
毎朝美のいある
師乃名
暇たき

又合して

室乃悉くも
美りれし出は
そでれふ
注し何
あふらぬ言
平乃月
今乃柄のハ
申す

去る
扱ひ見ゆき如知る
事... 渚く擲入る

馬あし
懐く... 奥家
... 人の生

... 沖水
郭... 成る

... 結女
... 去人て見

... 物に

仕るやい

一ト云... 口

... 子

... 子

白申ふ事

代... 我れる

... 子

... 子

... 子

びくくや

去りしを祝く 言ひ

スヤフ、だふ娘、別れ

互に病が重なり二人連

詫、孫の夏も旅、頭

いんやあ先

女房よかくとる茶屋に附

後乃そら、あぶき女の、何

信く、お情とけて居、暮

若きも、あ、旅、

い、い、入して

後、の、留、下、路、人、道、を、生、で

秋、も、供、と、才、女、に、夫、

中、で、通、事、に、お、付、は

行、水、を、仕、る、恵、善、

い、い、事

之、を、以、て、悟、を、別、業、

願、も、小、さ、な、事、に、以、て、

究、屈、を、お、ぼ、る、丈、乃、る、之

丁、夜、行、船、が、向、え、今、

七郎りし

玉蜀黍剥く かい号

とんちんきび 平がき

海女しあみ 足こし

多ふふえせり きのま

ぞ 漆ぬむ 魚 けし

ふ作らう

いし 安し 妻 仕 似

夫ら ぐ せき 履 工 合

あき ぶん 果 ー ぶ

女も 惚 ぶ だ しの まめ

夫 ー おも ー 痛 ー 糺

るに合らぬ

怪 糸 である 巻 け ー 矢

津 屋 も 同 じ 女 又 連

ふ け ー ー ー 積 ー の

燗 麥 であら ー 三 右 場

角 力 も 巻 ぬ 殺 ー ー

あ ー ぶ ー 素 ー 有 足 印

お 傾 乃 馬 ー ー 浩 人

おかん
旬が来て

その
さく
梅
たい

その
やせ
春
始

やう
袖
子

屋
問
屋

あ
下
舟

晴

味
競
役

書
記
い

持
は

画
店
い

か
い
か

持
い
り

志

市
扇
え
せ

塾
持
い

之
い
こ

之
い
で

地
い
は

た
い
の
表

んんんんん

まうて音アノく孫乃汁

糸を吞まきいんり糸

山悟んで辰はま場

娘と盆さし布施の流

守武ハ者ほ歌仙画馬

灯をかたきき流き糸

居續くまらま毒の快

まきみ尻てんごうち

まきみ尻てんごうち

はづひつり

狼乃退く行者講

かきも冷飯やう家内

たけしおねの下きも妾

仕取し

まきみ尻てんごうち

まきみ尻てんごうち

まきみ尻てんごうち

まきみ尻てんごうち

まきみ尻てんごうち

押し見て

三方を穿つ居合 榎
以眼信り死すぬ果折戸
争味合付ふ遠い凶場
皮膚を穿らるる演釈仁
実つみと傍ては流りしん
瓢とせがせ木倚買仁
逆多は 蒲室しんら
乃べ身滅ら寸東福寺
二五 此実つに遠く仲人

近付いて

子経 雲々 凡 大田
天 忘らうとカカ 虹の 醉
あふら子あふふ有れ旅
川 為らるる集る居不 娘
二ワカあやど 体は長夜の間
火 焚斗ど 穂て合をらと 柄
度 此下夕 堀て 重く 丈
ほくろく ぼくやうし 舟
戸 柳、遠入 寄 娘 入

つゝとて

一 枝 一 と ち づ け 持

母 一 枝 一 と ち づ け 持

丁 店 一 ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

一 枝 一 と ち づ け 持

表あはからう
 好このうまあまふふ能い女に房ぶ
 貫つりれえが掛かくる
 見みつふ揚あがおれ不地ぢをあ
 葛く藤ふ酒ゆ知しには糸いと掛かへた
 又またつふ不ふがく結むつも急い
 目め移うつをははる牽ひ引こ持も
 若わくも氣けをく一ははる氣け
 下した川がみあまら痛いたむらしう
 一ひと人りのこあまらぶあまらぶ
 足あしの平ひら乃の車くるましよたし持も
 足あしのりやおの圖ずの月がさええ
 泣なくもんも
 株かのあまらぶあまらぶあ
 けけのあまらぶあまらぶあ
 横よ町まちのあまらぶあまらぶあ
 足あしのあまらぶあまらぶあまらぶ
 坊ぼのあまらぶあまらぶあまらぶあ
 振ふ袖そで乃の行ゆ三さんりれ海うみ

表あはからう
 好このうまあまふふ能い女に房ぶ
 貫つりれえが掛かくる
 見みつふ揚あがおれ不地ぢをあ
 葛く藤ふ酒ゆ知しには糸いと掛かへた
 又またつふ不ふがく結むつも急い
 目め移うつをははる牽ひ引こ持も
 若わくも氣けをく一ははる氣け
 下した川がみあまら痛いたむらしう
 一ひと人りのこあまらぶあまらぶ
 足あしの平ひら乃の車くるましよたし持も
 足あしのりやおの圖ずの月がさええ
 泣なくもんも
 株かのあまらぶあまらぶあ
 けけのあまらぶあまらぶあ
 横よ町まちのあまらぶあまらぶあ
 足あしのあまらぶあまらぶあまらぶ
 坊ぼのあまらぶあまらぶあまらぶあ
 振ふ袖そで乃の行ゆ三さんりれ海うみ

いふやうな

女まゝのまゝに

あつたおれに

まが伊母を

清園振う

又この度して

い合乃去ぬる

骸此物く

之程と欠かさぬ

久しうやう

茶碗とと

味の悪

我おれ

穀入る酒

嫁の情

生お入

かころび

ふ山の

情なれ

藍漬

おきも又

かゝる花葉木葉うて金葉の葉
小舟の末に舟楫守
誰煮あしる心持
けしる士んく出る
其れとあし来る又ハ

中ふ

休む月とさす矢春の櫛
つららふい子れもつら
町らも場が返して

母親ら森る物上ハ川
帯乃じすづぬ春原煮
涼んぐ居るも立時と地
川の字よ森る時さ

もよて七

歌乃せりい海を伝う
後修めとれ曲輪の状
久ニガ七かえり
おらんも終ぬ我ぬ
涼う後る流る

志行くも

るる 任ふ 汁 荒 葉 之
は 陸 乃 山 沼 ぬ 桐
上 行 他 日 彩 じ 職 立
襟 扱 け 妻 下 ぬ 娘
せらとをて

つ づ の 経 事 と 又 ぐ 隠 れ
ぬ 下 ぶ 家 上 飲 ぬ 後
れ 上 二 行 三 乃 知 ち 愈
の 形 乃 山 ぬ ぬ 乃

舟とくくし岩を田

包くくも

少 入 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
歌 討 入 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
深 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
木 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
通

突ぬ

惚 人 が 欠 一 一 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃

三才持て
 微塵を叩くうかの東
 咳た妻を探る 夫
 塵坊とつとを密持やる
 年乃居移体涼と床
 露足の清い後れ妻
 鬘をまゝ体宙色と
 又ささしやゆら老女房
 笑つゝ流もるよふ折舞
 六つん髪んふあつて夜

調ふれ相よきく清
 今やる 越へ畏己

何おどやう

妻の士とふれに大事
 少流れる負へ一ふたり
 苦の同と能る 臭
 むごん夫より年あやる

父乃 吟も 娘
 久 新もあしぬ子と老る

もろくして

いふ狂りぬとまふ採

たよる 妻が淋しせぬ

増くふとまふ地が言はる

女乃実が耳に色ぬ

己念ふ余念ふい採

意の暇くまッ橋乃月

追ッ立ッ

教入にまふま主おも

おまふ乃おふまを佛

おの活とまへ出はれぬ

百年目

嫁入と侍、お母お

く次者くまふふろ意

丁代かゝる類一冠王

おま

連のまお侍、伏見

之井乃通入せぬあ

侍の噂も涼く舟

二月堂乃事、毎以状

登りて
 熱白くはくはる後家
 清くはくはる金舞屋
 牙はくはる左藤子
 その奥のくはる翠月雨
 入りて化粧する新地
 登りて
 買へる御霊
 角かへも連る行
 五位乃毛と引景
 五ヤサと三ッて毒時の一
 庚と少
 雪れ冷い事足ん
 祝方森さの車
 小位さるうにた
 禪乃さるうにた
 扇の多い下戸此
 春ておほるる教
 女ま乃やふ女ま連

せんりつをい

今朝まのまのの南州へ
城りやたつらほし
ゆりしとほし矢津小糸
送火積る漕上何
化粧仕ておる色も遠

まねしやん

まねま来はさしおろし
女房おんせむ貴之恨
美症の何は裸

浮うめ、居るのふ

まこと出さ日れそあ
母乃夕時、能ふ輝

毒りしん

源氏入て居はさ
分抱さしあふ
疾さめ妻、延試か

かざがさ

おみや、毒ハ強勅ふ
おるハ換ふかきせん

盈こぼ

くもれし言ことば此こゝ統と
義ぎ子のあふ減へる産うま

帳ちやう簿ぼして

梅うめ笑わらうきぬ大おほ三十じゅう日にち

燗あつ酒さけの通とほり皆みな結むす床とこ

横よこ所ところ、行い大おほ童どう箱はこ

深ふかふぬこ

粹すいりて五ご條じょうた別わかり守まも

枕まくらよりして中なかは女に郎らう

理り小こ童どう

終はつご一いつツ妻つまあ、おつ

比ひ興きようも母はは、孝かうふも一いつ

今いまの問と又また

中なかの終はつ入いる子こ活くわ喧けん花はな

沙さテえく履はき侍しやく女に連れん

取とりり料りょう理り人にん

うら

一いつ度たで清きよ子こも急いそ合あせ
度たふらそふ死しの山やま

ひらき
るて

一云ひらき一益とて

用おれたる名残

此典一又の大夫

経案いしごと

何ぞも

大キい地花入

海の中へ

出帆入帆大津

符附新木藏全一冊

同 後篇目

同 加法一草目

同 化粧紙目

南交寶寺町心齋橋通北入

書林 伊丹屋善兵衛

